

オンライン学習／学内実習の実践報告

－学びの保障と継承－

○ 東北福祉大学 総合福祉学部 黒田 文 (002095)

キーワード3つ：ソーシャルワーク実習、オンライン実習、学内実習

1. 研究目的

本研究は日本国内の covid-19 のパンデミックにより、2020 年度に相談援助現場実習の中止を余儀なくされ、オンライン／学内実習（以下、学内実習と記す）へ転換した実習教育の検証を行うことを目的にする。本学では現場実習が4年時の配属であることや実習生数が多い等の理由により、実習を次年度へ延期せず同年度内に学内実習で行って学生への学びの機会を確保することを6月に決定した。以降、文科省ならびに厚労省の関係部局から発出された事務連絡¹、一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟が整理した文書²をもとに、実習担当教員によるワーキンググループにて学内用実習プログラムの作成に着手した。その実施に際しては学外の現場実習指導者の協力を仰いで実習用教材の開発や内容の再調整を行い、オンライン学習の学内環境システムを整備する等の業務を背負った。具体的な内容や方法、進め方に関する議論と並行して学内実習教育に関する迷いや効果へのジレンマを抱えたまま学内実習を終了したのが現実である。他方、従来と異なる教育プログラム・体制を築く過程で得られた知見もあり、担当教員有志は今回の経験を一過性のイベントとして済ませるのではなく、何らかの形で今後の実習教育へ反映させるための評価を行う必要があると考えた。そこで本報告にて学内実習に対する整理・検証の結果を発表し、現場実習をより高度化あるいは効率化する方策を検討したいと考える。

2. 研究の視点および方法

本研究は東北福祉大学の実習担当教員の有志を中心に行った「オンラインを中心とした社会福祉援助技術学内実習プログラムの評価」に関するアンケート調査の一部である。発表は本報告者が担った調査に関する内容である。学内実習は、現場実習と同様に A) 職場実習、B) 職種実習、C) ソーシャルワーク実習（以下 SW 実習と記す）の3段階プログラムで行った。実習後、実習生を対象に実施した調査で各段階についてよかった点と課題・問題点（内容、方法、その他）を記してもらった。現場指導者には、1) 学内実習の実施に協力をしてどのような印象を持ったか、2) 学内実習で実施したこと（内容、方法、その他）で今後の実際の現場実習指導へ適用・応用することが可能だと考えられるものがあるかについて自由記述での回答を求めた。上記の回答に対して計量テキスト分析を行った。抽出語の構造を掴むため、記述の頻度が5以上のものに対し主成分分析を用いて情報縮約を行い MDS (Multi-Dimensional Scaling) で確認のうえ内容を解釈した。

¹ 『新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について（事務連絡）令和2年2月28日付』

² 『新型コロナウイルス感染症に伴う社会福祉士・精神保健福祉士養成の対応について 令和2年5月26日付』

3. 倫理的配慮

本学の研究倫理審査委員会の承認をえると共に本学会研究倫理指針を遵守している。

4. 研究結果

職場実習では10成分の用語が抽出された（データの全分散の64.7%が説明された）。抽出された用語からは次のような解釈が可能である（文章内で下線を引いたのは抽出された用語である）。「学生は、予定されていた自分の配属先以外の職場（施設、機関）について、動画を用いて広く学ぶことができた」と回答。学外講師の講話により職場について具体的に知ることができたこと、複数の内容からそれぞれの特徴を比較して理解できたこと等が挙げられた。」職種実習では11成分が抽出された（データの全分散の68.8%が説明された）。抽出用語により内容をつなげると、次の解釈が可能であろう。「社会福祉士の役割について、実際の業務について現場で活躍している社会福祉士から、複数の種別について知ることができたことが挙げられている。また、他の学生も同様の動画を視聴した後にディスカッションを行う機会も設けられていたため、理解した内容を確認し、疑問を解消しながら学べたことも言及されている。SW実習では11成分が抽出された（データの全分散の69.4%が説明されている）。抽出語を用いて内容をつなげると次の解釈が可能であろう。「社会福祉士が現場で遭遇している事例をもとに、実際に支援計画を立案したことや支援や方法に対する考えを学ぶことができた」と評価されている。しかし、支援のプロセスについては、アセスメントが中心となってしまう、ソーシャルワーク支援の全体像を掴むまでには至らなかったと危惧される。SW実習の期間も他学生と情報共有の機会があったことが異なる視点を学べたという良い影響があったと報告する者が多い。学生を中心とした発表により、支援に関する異なる観点を吸収できたことが利点に挙げられた。ロールプレイを通じて模擬面接を経験できたことも評価されている。注）用語の布置等は当日資料にて示す。

5. 考察

学内実習はどう頑張っても演習以上現場実習未満だが、学内実習の利点を強いて挙げるならば、実習生の配属予定であった実習先種別の枠をこえ、より広範な種別領域について集中的に学ぶ機会があり、社会福祉士とは何か？社会福祉士は通底のところでは何を実践することが求められているか？を十分に考える機会が与えられたことだと考える。また、その内容をふまえて学生が集中的にディスカッションすることができた流れも学びを推進したと考える。現場のことは現場で学ぶという現場主義は自明であるが、今回のような学内実習を経ても、現場実習へ赴く以前の事前学習の内容について動画等を用いてより充実させていくことができるのではないだろうか。さらに、多様な地域・場所における実践により多くふれることで実践の共通点の確認やバリエーションへの理解が深められると考えられる。

参考文献

紙面の都合上、参考文献は当日の発表時に提示する。